

28PA-am372

1年次における医系4学部連携による在宅訪問実習の取り組み

○大幡 久之¹、田中 一正¹、刑部 慶太郎¹、小倉 浩¹、稲垣 昌博¹、平井 康昭¹、倉田 知光¹、
天野 弘美¹、剣持 幸代¹、亀井 大輔²、大林 真幸²、木内 祐二³（¹昭和大富士吉田教育部、
²昭和大薬、³昭和大医）

【目的】昭和大学では平成27年度から全学的な取り組みとして、「患者と家族のナラティブを支援」する「在宅チーム医療の担い手の育成」を目的とした段階的な在宅医療学習カリキュラムの構築を行ってきた。1年次においては、約580名が全寮生活を送る山梨県富士吉田市の協力の下、在宅訪問実習を必修・4学部連携で行っている。今回、3年目となる平成29年度の取り組みについて過去2年間の結果と対比させて報告する。

【方法】在宅訪問学習に先立って、事前学習では1班3-5名（学部混成×147班）のグループごとに訪問先までの公共交通機関などを用いた訪問ルートを作成、周辺施設等の生活環境の確認、訪問時のトラブル事例への対応などを討議し実施計画案を作成した。実習当日は、地域在宅あるいは高齢者住宅にお住まいの方々を訪問し、1-2時間お話をさせていただくとともに、周辺の生活環境などを実際に確認し、帰校後に各班でその方の「ナラティブ」を中心にまとめを行った。

【結果および考察】実習前後にアンケートを実施し、過去2年間との対比を行うとともに、各学部生の特徴についても検討した。プレアンケートで「コミュニケーションには不安がある」と回答した学生は全体で32%、薬学部生が最も高く39%、医学部生は20%で最も低かった。ポストアンケートでは「コミュニケーションの重要性がわかった」と回答した学生は全体で94%であり、学部間の差はなかった。「その人のナラティブについて感じる事ができた」と回答した学生は90%であり、一昨年の66%、昨年の87%から増加した。一方、受け入れ先の高齢者も昨年同様約9割が本実習は面白く、学生の態度は良好と回答した。今回、147班に対して自宅の受け入れ先が64件であり、受け入れ先充実のための方策が今後の課題である。